



## 安倍の貞任

「地方の時代」を実現した

貞任の身長は六尺（約百八十センチメートル）を越え、大きく色白の体であったという。

貞任は、平安時代末期の武将で、奥六郡と呼ばれた現在の盛岡市から奥州市の辺りまでを支配していた豪族、安倍頼時の子供である。

奥州市胆沢区若柳に「貞任胆沢堰」と呼ばれた堰がある。貞任が胆沢川の水を利用して稲作を拡大させ、人々の暮らしを安定させようとしたようである。たいへんな工事であったが、貞任自らも鋤を持ち、十キロメートル以上の水路を完成させたという。安倍の一族はとても評判がよく、地域の住民から信頼されていた。

陸奥国（現在の東北地方一体）の長官、陸奥守の藤原登任が、貞任の父・頼時の勢力があまりに強くなりすぎたため、「朝廷の命令にしたがわず、税や貢ぎ物を納めなかったり、衣川の南にまで支配を広げようとしたりした」という疑いをかけ、安倍一族をたおそうとして攻め込んできた。攻め込んできた登任は、都から来た役人で、

働く期間が終わる頃であった。都に帰るのに、何の手柄もなく帰ることはできないと、砂金や良い馬が多くとれる陸奥国を自分のものにしたかったのが、本当の理由であったと言われている。

これを安倍の一族で迎え撃った戦いを鬼切部の戦い（一〇五一）という。貞任は、父頼時を助けて激しく戦い、敵は完敗、登任は都へ戻された。しかし、朝廷は次に、戦上手で有名な源頼義を陸奥守・鎮守府将軍として送り込み、再び戦いが起きる。鬼切部の戦いから十二年続くこの長い戦いを、前九年の合戦という。

初めは、貞任の父・頼時が源頼義に従っていたが、頼義は、「頼時の息子の貞任が頼義の部下の人や馬を殺したり傷つけたりした」との疑いをかけ、貞任に厳しい罰を与えようとした。納得のいかないう仕打ちに頼時は激怒し、ついに頼義と戦う決心をしたという。この出来事は阿久利川事件（一〇五六）といい、なかなか戦いをしてはならない安倍氏を戦いに誘い、戦の功績をほしがった頼義の畏れた、とも言われている。

翌年（一〇五七）、頼時は戦死するが、長男の貞任は兄弟の宗任らと協力し戦いを続けた。同年十一月、貞任は河崎柵（現在の一関市川崎町）に四千名ほどの兵力を集め、黄海（現在の東磐井郡藤沢町黄海）で頼義軍と戦った。安倍一族の固い団結のもと、貞任

は総指揮官となり、鬼神のごとく戦ったという。頼義軍は貞任軍より少ない兵力で、しかも、寒い冬の戦いの準備も不足していたことで、最後には頼義と息子の義家を含む、わずか七騎で脱出する完敗だったそうである。この戦いを黄海の戦いという。

しかし、頼義は安倍一族を倒すことをあきらめてはいなかった。一〇六二年、出羽（現在の秋田県から山形県のあたり）の豪族である清原氏に応援を頼み、頼義軍三千は、清原武則らの軍一万と共に攻撃を再開した。貞任は勇ましく戦うが相手は大軍、多くあった安倍氏の柵（砦）は次々と破られていった。

衣川柵で破れた貞任が馬に乗って坂を上り、逃げようとした時、次のような伝説が残っている。貞任を追いつめた頼義の息子、源義家が、馬上から「衣のたてはほころびにけり（衣の縦糸はほころんでしまった。）」《衣川の館は、破られてしまった》と下の句を詠みあげ、貞任は、「年を経し系の乱れのくるしさに（何年も経った系の傷みが激しいので）」《長期の作戦の乱れがはなはだしいので》ととっさに上の句をつなげて返したという。その返事に感心した義家は、貞任を見逃したという伝説である。この伝説の舞台となった坂は、現在の衣川区古戸にあり、「二首坂」と呼ばれている。

同じ年の九月には、貞任の最後の砦、厨川柵（現在の盛岡市）

まで頼義の軍が攻め込み、貞任らは粘り強く戦ったが、最後の柵も破られてしまう。重傷を負った貞任は捕まり、頼義の前に連れてこられた。

貞任は、たいへん大きな体格だったので、大きな楯にのせられ、六人がかりで運ばれたという。頼義の前に、貞任は、頭を下げてから死んだと伝えられている。これは、敵に対する最後の礼儀で、敵からも、武士として立派な最期であったとほめられている。

貞任の家族や兄弟達も殺されたり、捕まったりして安倍一族の勢いは失われた。しかし、貞任の妹と結婚し、貞任と共に源軍と戦った藤原経清の息子・藤原清衡は、その後、初代奥州藤原氏として、衣川に近い平泉に本拠地を持つ奥州の覇者となる。そして、その奥州藤原氏も、再び源軍と戦うことになるのである。



安倍館のあった山（衣川区）

※参考文献

『日高見の時代 古代東北のエミシたち』 河北新報社

『平泉藤原氏の祖・安倍氏の戦い 陸奥話記

―前九年の役― 板橋源先生の講義より』 板橋 慶子 著

『衣川と安倍氏の歴史を考える研究集会

安倍氏シンポジウム 報告書』 衣川村・衣川村教育委員会

※肖像画の転載ホームページ

・福島美術館

「安倍貞任・宗任図」 (狩野古信 筆／伊達吉村 賛) 左幅



前九年の役の頼義と貞任の戦いから